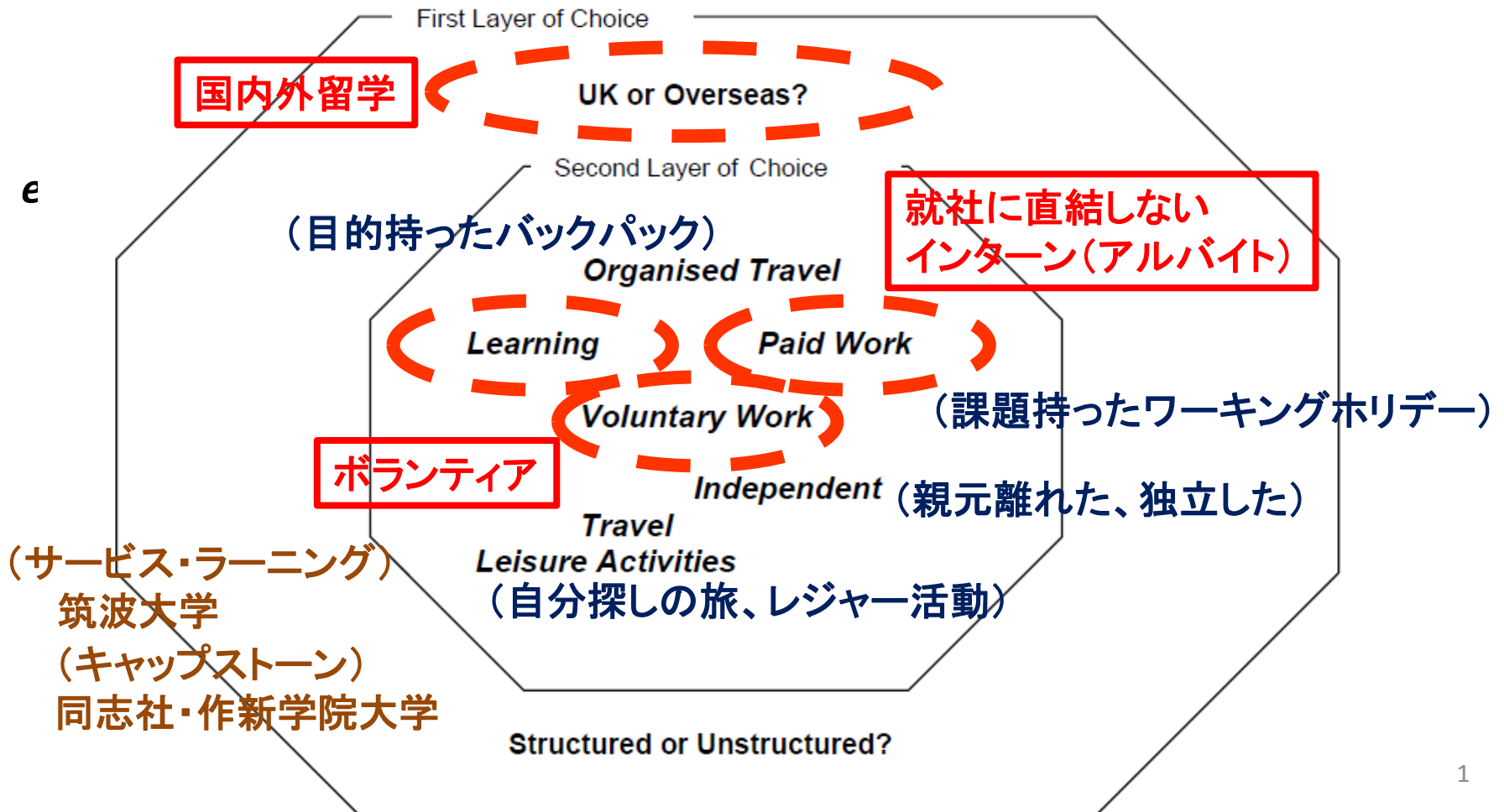


2004年ロンドン大学Andrew Jones教授の
英国・教育技能省受託研究「ギャップイヤーの概念図」



「日本版ギャップイヤー(愛称:Jギャップ)」の要素は、 親元離れたインターン・ボランティア・国内外留学

Model of Choice in Gap Year Activities

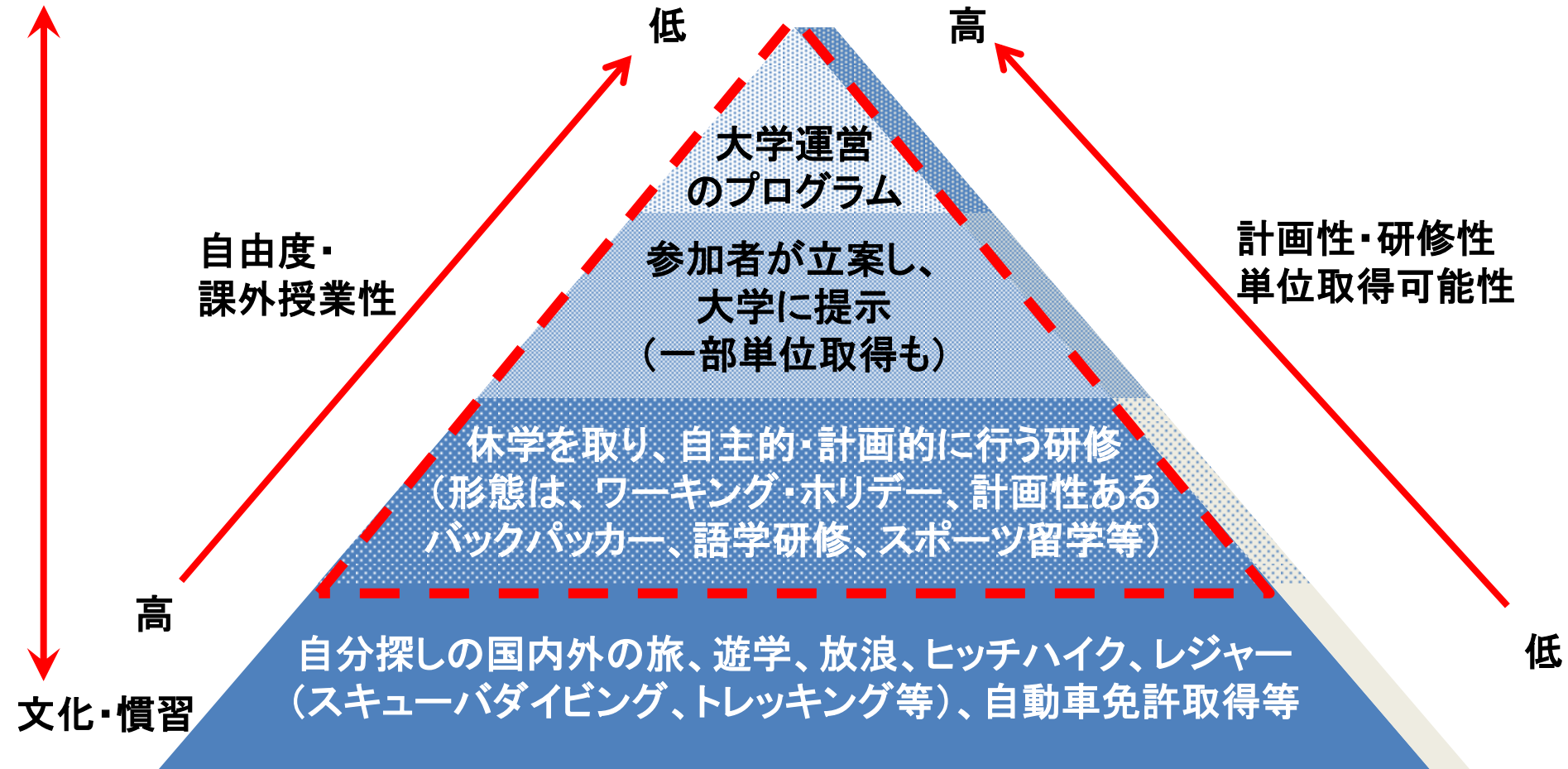


ギャップイヤーの階層イメージ

“親元離れた、インターン、ボランティア、国内外留学(基本は正規外)”



制度(学内・奨学金)・研修



日本の教育現場のコンセンサスは、赤い破線の第3階層までか？文化・慣習として定着してくると、第4層も認識されることになる。第1階層はプリンストン大、2は国際教養大等がモデル



JGAPが高等教育機関に導入を提唱する 「日本版ギャップイヤー(Jギャップ)」3軸モデル

②ダイバーシティ理解・
スキルアップ・キャリア
マインド醸成等

③利他意識・構想力
醸成・文化理解・
時間管理・
等

インターン

「Jギャップ」(約4ヶ月～1年)

ボランティア

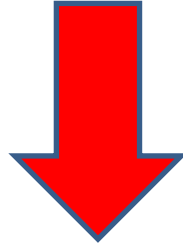
国内外留学

(限界集落・被災地・
国内外提携大学留学等)

①コミュニケーション能力向上・社会
問題理解・地域地方理解・内省等

まずは、親元離れた“非日常性”を
構築することが肝要

Q: ギャップイヤーは、「ゆとり教育」回帰？



A: そうではなく、メリハリをつけることと、本格的“社会・就業体験”を大学教育に組み込むことの提案。強制でもなく、自主的。

受験で脇目を振らず、“オン状態”だった受験高校生(例: 現在東大入学者は中高一貫校出身が5割)、「就活」で疲弊した大学4年生(また、職歴なき既卒未経験者・卒業3年未満退職者)が主体。再学習を要する生徒や学生は、対象外か。問題意識ある大学からの導入が肝要。導入モデル大学の制定も考えられる。

ギャップイヤーの導入ロードマップ(案)

- ・大学の国際競争力強化
- ・社会問題発見解決型人材育成

- ・秋入学で、半年のギャップイヤー(国際教養大学モデル、GY単位化で4年組と、4年半組)
- ・貧困家庭にギャップイヤー奨学金(育英奨学金のような形)
- ・大学プログラム(プリンストン大モデル)か、個人計画型 か、NPO・旅行会社計画型、ハイブリッド型

G13や「東北自由大学」での
ギャップイヤー導入

2011年度

私立大学
希望大学
30校

2012年度

多くの大学で、GY
が利用できる
環境

2013年度

ダイバーシテイ化が進み、高等教育の国際競争力強化、新卒一括採用の崩壊へ